

1. 付着割裂破壊 ～で～ (引張) 鉄筋が“たる” → 引張少く
→ 鉄筋の節でコンクリートを押し開く事によるひび割れ 発生部位 柱・大梁
-
- 柱 鉄筋 ひび割れ
2. ～で～ 脆性的な破壊、良くひび割れ

3. セン断圧縮破壊 ～で～ 作用する力(圧縮力・せん断力)が大きい

コンクリート 強度高め ← コンクリート強度に ← 傾斜面に応力 (圧縮応力度、せん断応力度) が大きい
対して大きめの応力 (応力度) が小さい

とくに 単位面積あたりの応力 (f) 例: 圧縮応力度 = $\frac{\text{圧縮力}}{\text{面積}}$

4. 柱・梁接合部の帶筋比 (P_w) → 0.2%以上
-
- 柱 大量の量の割合 → 基本的には 1% が良い
梁 帯筋 (T-φ) の量の割合
- 柱幅 帯筋 (1組の断面積 a_w)
柱間隔 (φ) ×
帶筋比 (P_w) = $\frac{a_w}{B \cdot X}$

N0.12 鉄筋コンクリート造の梁

1. 梁の最小あばれ筋比 → 0.2%以上

$$\text{あばれ筋比} = \frac{a_w}{B \cdot X}$$

梁の幅 B → あばれ筋の間隔 (φ) ×
1組のあばれ筋断面積 a_w

2. あばれ筋の長期許容応力度 → 鉄筋強度を高くしても一定

$$\text{許容応力度 (N/mm²)} \rightarrow SD > 95A \quad (\text{降伏応力度 } > 95 N/mm²) \rightarrow 195 N/mm²$$

SD345 (" 345 ") → ..

応力度 (単位面積あたり) 一定

3. 許容付着応力度

単位 鉄筋の下に → 鉄筋と接着面積が減る
許容付着応力度 → 単位面積あたりの付着力 $\frac{N}{mm^2}$ など
付着応力度が増える
安全確認 → 許容応力度と応力度
付着応力度と空隙が大きめで
付着応力度と空隙が大きめで

4. クリップ等の発生条件 → コンクリートが長期的圧縮力を受けた結果
→ 持続的荷重を受けひびきが増える現象

→ 圧縮力を減少
↓ 鉄筋が負担
↓ 圧縮鉄筋 (箇)

クリップ等が ← コンクリート圧縮鉄筋 (箇)
減少